

# 大塚山処分場再開にめど

## 第3処分場 3月から搬入

### 大平興産

大平興産（本社：東京都千代田区、山上毅会長）が運営する千葉県富津市の大塚山処分場が、早ければ三月にも営業再開の見通しとなった。搬入を開始するのは第三処分場で、既に二〇〇六年三月、千葉県の完成検査を終了しオープン間近となっていたが、その後第二処分場の塩化物イオン漏れ問題が発覚したため、同年八月に県の勧告を受けて大塚山処分場への搬入がストップした形になっていた。今回、営業再開のめどが立ったことにより、多くの教訓とともに大平興産の大塚山処分場が再スタートを切る。

容量は33万立方m

搬入がストップしたの  
は、〇六年七月、埋め立  
て終了が近づいていた第

二処分場の観測井から一  
九〇〇mg/lの塩化物  
イオンが検出されたこと  
が発端。同処分場は、一  
九八五年、立地に適した  
岩盤遮水工法の管理型処  
分場として稼働開始。徹  
底した搬入管理とともに

優良な処分場としての実績を重ねていたことから、今回の出来事は関係者に大きな波紋を投げかけた。

その一つが、岩盤遮水の処分場から何らかの漏れが発生した点。これまでの県の調査でも有害物質は検出されていない

が、水の状態を見る一指標である塩化物イオンが高めの濃度で検出されたことから、同社は〇六年七月、第三者機関である日本地質汚染審査機構（榆井久理事長）に原因究明などを依頼した。

が、岩盤層の中のわずかな火山灰層を通じて流動していたことが判明したことから、揚水による地下水流動系の変更に徐々に改善が見られるようになった。

でこのような地下水の流動系を解明したのは全国で初めてではないか。原因が判明し、それに合った対策を取っているのに塩化物イオン濃度も徐々に改善されている。今回の成果は今後の処分場管理運営に生かされるだろう」と評価した。

これまで一年以上にわたり、現地調査や実証実験を踏まえた上で八回にわたる審査会を開催。その結果、処分場を含めた地下構造の機構解明と対策に成功した。問題の塩化物イオン漏れの原因

今回の件について同社の山上会長は、「岩盤遮水処分場の基準のあり方自体に問題を投げかけたのではないかと。これが基準見直しのきっかけになれば」と話している。また、調査に当たった榆井理事長は「廃棄物処分場

営業再開する第三処分場は、埋め立て容量が約三三万立方m。現在行っている変更工事が完了次第、搬入が再開される予定。

環境新聞  
2008年1月9日（水曜日）